

—オーディオ史上初の波形再現スピーカーシステムについて(2)—  
 <ある「老オーディオマニア」の無謀な挑戦の物語の紹介>

弁理士 阿仁屋節雄

「波形再現スピーカーシステム」とは、CDなどのソースに刻まれた「音楽波形」を、スピーカーでほぼ100%の精度で再現するシステムである。すなわち、このシステムでCDの音楽を再生し、マイクをスピーカーのまじか（30cm内外）に置いて録音し、その録音・記録された「音楽波形」と、元のCDに刻まれた「音楽波形」とを比較したとき、その一致率がほぼ100%であるということである。



ここで、同じ条件で測ることができた現状の市販 SP システムの「波形再現率」は、全て50~70%程度であったので、これは、画期的なことである。なお、このことは、換言すると、現状の SP から飛び出してくる音は、30~50%も歪んでいるということでもある。もし、アンプの歪が1%もあったなら、それこそ大騒ぎになることに照らすと、歪が数十%もあるという事実は、一体全体どう考えたらいいいのか。

一昔前のオーディオ界では、HiFi（高忠実再生）や原音再現などという言葉がもてはやされていた時代があった。その時代は、オーディオの目標は、HiFi（高忠実再生）や原音再生であるとされていたように思う。しかし、今思うと、HiFi（高忠実再生）や原音再生の物理的定義は全くなされていなかったように思うし、それは現在も同じである。

もし、HiFi（高忠実再生）や原音再生が、CDなどのソースに刻まれた「音」をスピーカーで再現すること、ということであれば、「100%の波形再現」は、究極の「HiFi（高忠実再生）もしくは原音再生」である、ということになる。

ちなみに、「波形再現率50~70%」では、忠実度50~70%（歪が30~50%）であり、「HiFi（高忠実再生）もしくは原音再生」にはまさに程遠い、ということになる。何ゆえなら、CDなどのソースに刻まれた「音」とは、物理的にみれば、CDなどのソースに刻まれた「音楽波形」そのものだからである。つまりは、CDなどのソースに刻まれた「音楽波形」を100%再現する「波形再現」は、CDなどのソースに刻まれた「音」を100%再現することであり、そのことはまさに、究極の「HiFi（高忠実再生）もしくは原音再生そのもの以外の何物でもない」のである。



この見慣れない造りの補正もなされていることに驚かされた。  
「評述で、なんだろう? という、これまた書かれた趣向である。しかし、これを調べていくうちに、波状な原音再生にとっては驚くべきことが判明してきた。それは、「原音が持つ」が「波形再現性」を理想的に示している周波数の一帯のなかにある、ということである。

それとすると、「周波数特性」と「非線形特性」とを理想的なものにできれば、「波形再現」が可能であるらしいことが判明してきた。逆に言えば、ダンピング特性、歪み特性、インパルス応答特性などなどが仮にどうであれ、結果的に「周波数特性」と「非線形特性」とが理想的なものにならなければ、「波形再現」はできないことになってしまいうるのだ。

こうなると、現代のスピーカーをみると、

という見慣れない造りの補正もなされていることに驚かされた。  
「評述で、なんだろう? という、これまた書かれた趣向である。しかし、これを調べていくうちに、波状な原音再生にとっては驚くべきことが判明してきた。それは、「原音が持つ」が「波形再現性」を理想的に示している周波数の一帯のなかにある、ということである。

それとすると、「周波数特性」と「非線形特性」とを理想的なものにできれば、「波形再現」が可能であるらしいことが判明してきた。逆に言えば、ダンピング特性、歪み特性、インパルス応答特性などなどが仮にどうであれ、結果的に「周波数特性」と「非線形特性」とが理想的なものにならなければ、「波形再現」はできないことになってしまいうるのだ。

こうなると、現代のスピーカーをみると、



この見慣れない造りの補正もなされていることに驚かされた。  
「評述で、なんだろう? という、これまた書かれた趣向である。しかし、これを調べていくうちに、波状な原音再生にとっては驚くべきことが判明してきた。それは、「原音が持つ」が「波形再現性」を理想的に示している周波数の一帯のなかにある、ということである。

それとすると、「周波数特性」と「非線形特性」とを理想的なものにできれば、「波形再現」が可能であるらしいことが判明してきた。逆に言えば、ダンピング特性、歪み特性、インパルス応答特性などなどが仮にどうであれ、結果的に「周波数特性」と「非線形特性」とが理想的なものにならなければ、「波形再現」はできないことになってしまいうるのだ。

こうなると、現代のスピーカーをみると、



この見慣れない造りの補正もなされていることに驚かされた。  
「評述で、なんだろう? という、これまた書かれた趣向である。しかし、これを調べていくうちに、波状な原音再生にとっては驚くべきことが判明してきた。それは、「原音が持つ」が「波形再現性」を理想的に示している周波数の一帯のなかにある、ということである。

それとすると、「周波数特性」と「非線形特性」とを理想的なものにできれば、「波形再現」が可能であるらしいことが判明してきた。逆に言えば、ダンピング特性、歪み特性、インパルス応答特性などなどが仮にどうであれ、結果的に「周波数特性」と「非線形特性」とが理想的なものにならなければ、「波形再現」はできないことになってしまいうるのだ。

こうなると、現代のスピーカーをみると、



この見慣れない造りの補正もなされていることに驚かされた。  
「評述で、なんだろう? という、これまた書かれた趣向である。しかし、これを調べていくうちに、波状な原音再生にとっては驚くべきことが判明してきた。それは、「原音が持つ」が「波形再現性」を理想的に示している周波数の一帯のなかにある、ということである。

それとすると、「周波数特性」と「非線形特性」とを理想的なものにできれば、「波形再現」が可能であるらしいことが判明してきた。逆に言えば、ダンピング特性、歪み特性、インパルス応答特性などなどが仮にどうであれ、結果的に「周波数特性」と「非線形特性」とが理想的なものにならなければ、「波形再現」はできないことになってしまいうるのだ。

こうなると、現代のスピーカーをみると、



この見慣れない造りの補正もなされていることに驚かされた。  
「評述で、なんだろう? という、これまた書かれた趣向である。しかし、これを調べていくうちに、波状な原音再生にとっては驚くべきことが判明してきた。それは、「原音が持つ」が「波形再現性」を理想的に示している周波数の一帯のなかにある、ということである。

それとすると、「周波数特性」と「非線形特性」とを理想的なものにできれば、「波形再現」が可能であるらしいことが判明してきた。逆に言えば、ダンピング特性、歪み特性、インパルス応答特性などなどが仮にどうであれ、結果的に「周波数特性」と「非線形特性」とが理想的なものにならなければ、「波形再現」はできないことになってしまいうるのだ。

こうなると、現代のスピーカーをみると、

このようにみえてくると、「波形再現 SP システム」は、一昔前のオーディオ界の目標であったが、現実には50～70%程度しか実現できていなかった「HiFi（高忠実再生）もしくは原音再生」を、100%実現してしまったシステムなのである。

では、その「HiFi（高忠実再生）もしくは原音再生」を、100%実現してしまったシステムの音は？

確かに、大半の「普通のソース」を再生すれば、この世のものとは思えない「妙なる音」でもなければ、度肝を抜かれるような「ド迫力の音」でもない。がしかし、もし万が一、ソースに「この世のものとは思えない妙なる音」や「度肝を抜かれるようなド迫力の音」が刻まれていれば、それを100%そのまま再現するので、「この世のものとは思えない妙なる音」や「度肝を抜かれるようなド迫力の音」がそのまま飛び出してくるのである。

以上